





# 審査結果報告書

平成 29 年 2 月 7 日

主査	氏名	阿部 翔太	
副査	氏名	岩瀬 和也	
副査	氏名	岡本 浩嗣	
副査	氏名	庭野 真一	

1. 申請者氏名 : DM13011 小川 顕史

2. 論文テーマ : 内因性副交感神経刺激性/動脈硬化促進性ペプチド、サリュージン $\beta$ のヒト血漿中における生理的変動

3. 論文審査結果 :

サリュージン $\beta$ は、内因性副交感神経刺激性因子の可能性が示唆されている 20 アミノ酸残基からなる多機能性生理活性ペプチドである。動物実験においては副交感神経への刺激作用が考えられて来たが、ヒトにおける動態その他は明らかではなかった。申請者は、50名の健常人を対象にサリュージン $\beta$ の濃度と心拍変動を測定した。夜間睡眠中、バルサルバ法前後、排尿前後、日中行動下など様々な状況においての測定を行った。血漿中のサリュージン $\beta$ は夜間帯に低値を示し、起床後に上昇する日内変動を示した。バルサルバ法直後からサリュージン $\beta$ の濃度は低下を示し、30分後に最低値となりそれから上昇した。健常人においてはサリュージン $\beta$ 濃度は副交感神経の指標と負の相関を示し、副交感刺激によって低下することを明らかにした。これらのことから、サリュージンは副交感神経刺激による急激な循環動態の変化に対する緩衝作用を示している可能性が示された。

当論文は、取り扱いが困難な生理活性ペプチドホルモンであるサリュージン $\beta$ の測定系を開発し、ヒトにおけるサリュージン $\beta$ の動きを示した初めての研究であり、今後の全てのサリュージン $\beta$ 研究の基礎となるともいえる非常に重要な所見である。サリュージン $\beta$ は心血管系の様々な病態に関与している可能性も示唆されており、当論文の持つ臨床的インパクトは非常に大きいと考えられる。また、学位論文は臨床データを用いた研究手法に立脚していることも示された。公開審査では、申請者は副査及び主査からの質問に適切な返答が可能であった。副査及び主査は、学位論文の内容の高さ、質疑応答の的確さから医学博士の学位にふさわしいと判断した。